

### 林間学校がありました

6月10日(水)、11日(木)の両日、一泊二日の林間学校がありました。5年生にとっては小学校に入り初めての宿泊体験です。前日(9日)の結団式や当日朝の出発式での子どもたちはとても良い表情をしていました。

当日は、1人の欠席もなく5年生全員(40人 38人+2人のどんぐり学級児童)が参加できました。全員参加ということは本当に嬉しいことです。今回の林間学校には教頭先生が団長として引率しました。

心配された天候ですが、1日目、2日目とも多少雨が降りましたが、雨具(カッパ)を用意するなどして予定した全ての活動を計画通り実施出来たそうです。

林間学校について少し説明します。

#### (1)行き先・宿泊施設

行き先は八ヶ岳少年自然の家(北杜市高根町清里)です。県内には他にも幾つもの施設がありますが、雄大な自然の中で活動できる、ということで一番人気の高い施設です。そのため希望する学校が多く、木曜日～金曜日という日程は希望校が殺到し抽選となります。県内には他にも幾つかの林間学校で使える施設があります。私自身実際に使ったことのある施設だけでも愛宕山少年自然の家、中富少年自然の家などあります。河口湖畔の勝山小に勤務した時は、西湖キャンプ村を使いました。バンガローにグループ毎宿泊したのも懐かしい思い出です。

#### (2)内容

林間学校というと皆さんはどんなイメージを持ちますか。一般的には、夜のとばりが降りた頃、全員で「遠き山に日は落ちて」を歌い、その中をたいまつを掲げた火の神様が降り立ち、「火の話」をする。その後、グループのリーダーに、「友情の火」とか「団結の火」など言って火を分ける。そして、火を受け取ったリーダーと火の神様が一緒に中心に組まれたやぐらに点火する。燃え上がる炎を前に「燃えろよ燃えろ」を歌う。炎を囲んでグループ毎の出し物やフォークダンスをする。

この流れが、林間学校定番のキャンプファイヤーです。しかしこの頃はキャンプファイヤーをする学校は随分と減りました。(自然保護、自然への配慮という面もあります)本校では暗闇の中での「ナイト追跡ゲーム」をしました。

また、本校の活動の特色は、野外炊飯を行うことです。いわゆる飯盒(はんごう)炊飯です。飯盒でご飯を炊いた経験は多くの方がお持ちでしょう。何度やっても美味しくご飯を炊くのは難しいものです。「初めちよろちよろ(弱火)中ぱっぱ(強火)最後は熾火(おきび)で蒸らす」といいますが、少し芯のある半煮えのご飯になることが多いものです。でもそれも林間学校の懐かしい思い出です。そうした不自由さを経験することが林間学校の良さかもしれませぬ。人は豊かな生活に慣れると今の恵まれた生活に感謝する心を見失ってしまう生き物ですから。

家を離れ、親元を離れての初めての宿泊体験、5年生の子どもたちにとって大きな体験になりました。たった2日の経験でしたが、1人ひとりの心に大きな思い出となったことでしょう。全員が参加出来、沢山の貴重な体験を通し、思い出という大きな土産を持ち帰った素晴らしい林間学校でした。来年の修学旅行に向けての宿泊訓練という意味でも子ども達1人ひとりに大きな成長が見られたそうです。

## 「幸せの気持ち」大切にしていきたいですね

人は、過ぎ去った過去のことを美化する、といわれます。私たちが何年前のことを思い起こすと、何もかもが懐かしい淡いセピア色の幸福感に包まれ思い出されることがあります。しかし、冷静になって考えてみれば、当ても辛いこと、苦しいことがあったに違いないのです。ですが過ぎ去ってから、昔の事を思い起こすと、全てが楽しい思い出となっています。この不思議な心の働きを著名な脳科学者の茂木健一郎さん(NHKテレビ、毎週火曜日午後10時より放映「プロフェッショナル仕事の流儀」に出演)は、「**幸福な感情は時間が経つと増幅される**」と説明しています。

実は、私たちの脳(こころ)がこのような働きを持つからこそ、私たちは健やかに生きていけるのだともいえます。私たちの生活には辛(つら)いことが多くあります。皆さんの中にも、仕事や人間関係のストレスで身も心も疲労し悲鳴を上げている方も多いかと思えます。ですが私たちの心は、過ぎ去った過去の苦しかったことは忘れ、楽しかったことだけを心の中に留めるのです。そのために、時間が過ぎると、気持ちを新たに生きていくことが出来ます。大げさに言えば、このような脳(こころ)の働きは、神様が私たち人間という「悩める生き物」に与えてくださった「生きていくための心の仕組み」なのかもしれません。

実は、この話を聞き、平成6年に愛知県でいじめを苦に自殺した高校生、大河内(おおうち)君のことを思い起こしました。大河内君の事件は、それから続出する「いじめによる自殺」の引き金になった象徴的な事件で、当時、教育界だけでなく世間にも大きな衝撃を与えました。大河内君は手記を残しました。そこには、家族で行った楽しい旅行の思い出が綴られており、読む人の涙をさそいます。

大河内君は学校では、ワル仲間からふざけあい似せていじめを受け、また、お金をせびられ、そのため家からお金を持ち出していました。また、「パシリ」といって、ワル仲間の言いつけで使い走りさせられ、命ぜられるままに盗みまでしていました。でも、懸命に生きていました。生きたかったのです。若く、輝く未来がありました。

彼を死に追いつめたのは、直接的にはワル仲間の執拗なまでの「いじめ」です。学校がこのことに気がつかなかった、というのは言い逃れとしか思えません。そして、遺書を読むと、家族との楽しかった旅行、楽しい団欒の様子が綴られています。それがあったからこそ大河内君は、残酷ないじめに耐えることが出来ました。でも、必死で頑張っていた心がある時「ポキン」と折れてしまいました。それは、ワル仲間から脅され自転車を盗み、そのことを父親に厳しく咎(とが)められた事件です。そのことが引き金になり、彼は死を選びました。絶望的な学校生活の中で大河内君を支える唯一の救いが家族との楽しい一時、思い出でした。いつかまた行くことが出来るかもしれない家族での楽しい旅行への夢でした。でも、慕っていた父親から、ダメ人間のレッテルを貼られた時、彼の最後の支えはなくなりました。

私たちの脳は、過去の出来事を美化する働きがあります。「(生き)永らえば、またこの頃や偲ばれん。…」と、古人も歌いました。でも、この世を生きていくには、私たちの心には支えが必要です。それは、家族の愛情かもしれません。楽しかった思い出かもしれません。何かしらの楽しい思い出を持つことは、今を生きる力になると共に、大きな困難を乗り越える力になります。

ストレスの多い現代社会を生きていくことは大人だけでなく子どもも大変です。ですが私たちの心は、このような過酷な社会を生き抜くことの出来る仕組みを備えています。その心の仕組みを大切にしていきたい、そんなことを思いました。